

「もっとウキを知りたい～基本を覚えて使い分けよう～ウキ戦術～」

今回は、浅ダナ釣りに使うウキの概論をテーマにする。浅ダナ釣りにも各種の攻め方があるが、それぞれのウキ解説に入る前に、前提を整理しておく。

浅ダナ釣りはウキの機能が最も求められるといえるほど繊細。そのため、それぞれの攻め方に適した状況、ウキの形状、構成などを紹介することで、何が変わるのかを「尽心作」の製作者である北村滋朗氏に紹介してもらおう。

エサがウキを変える

本誌2005年10月号の特集「デカペレチョウチン」で紹介された伊藤さとし氏のウキは、驚くような極太のトップが装着されていた。

比重の重いペレット系のデカだんごを支えるウキが必要とされ、生み出されたものと考えられる。

「エサがウキを変える」

これがヘラウキの流行を形づくっているのではないだろうか。



Type-B ベースのオーダーメイドウキ。極太トップでペレット系のデカだんごを背負う

エサ・ハリス・ウキチャート

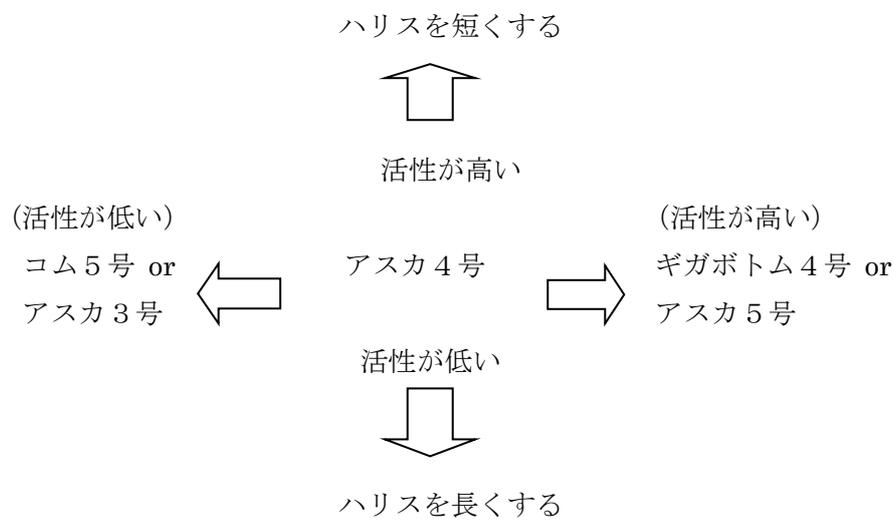
釣れないときは、ヘラブナの口に近いほうから手をつけていくのがセオリーである。具体的には、エサ、ハリの大きさ、ハリスの長さ、ウキの順と考えられる。これを整理すると、イラスト1、2のようなチャートに整理できると考える。

イラスト1 エサチャート例



イラスト2 ハリ&ハリスチャート例

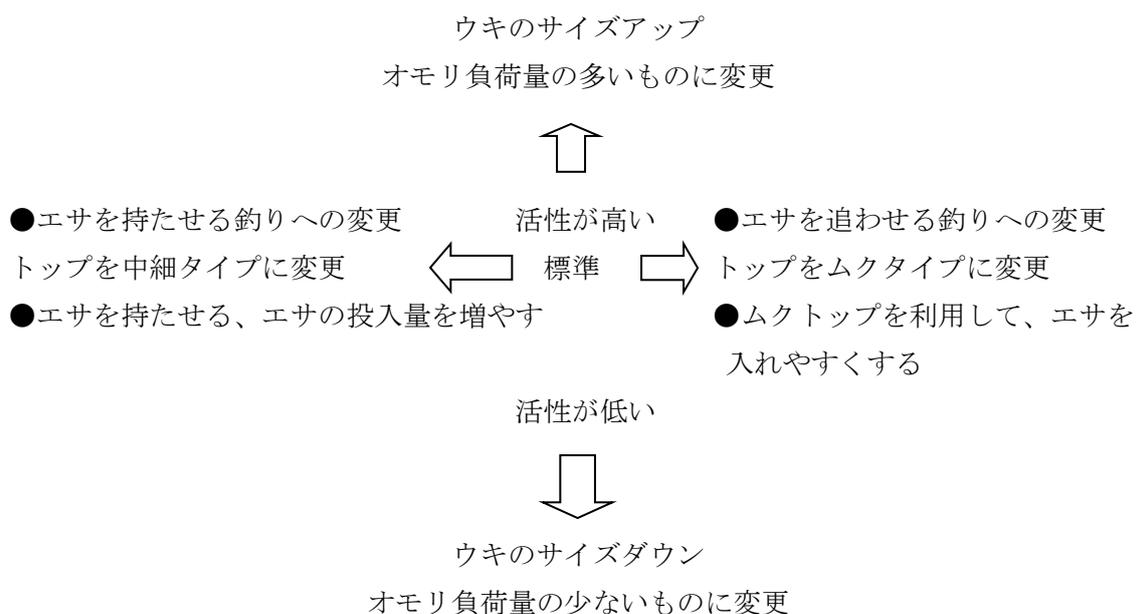
基準のハリを「アスカ4号」とした場合



エサやハリ&ハリスの長さにも基準が必要なように、ウキにも基準が必要である。

イラスト1、2のチャートをウキにも取り入れると、イラスト3のように整理できると考える。

イラスト3 ウキチャート例



私の製作する「尽心作・匠」では、ウキの選択や交換の目安として、オモリ負荷量を表示している。これを目安にすると、ヘラブナがハシャいでウキがなじまない場合、同タイプでオモリ負荷量の大きいウキに、容易に交換することができる。

私はヘラウキ製作において「標準オモリ負荷量」という考え方を提唱している。この詳細については、改めて解説したい。



Type-C2 の銘を入れた反対面の画像、オモリ負荷量と Type 名を表示している。

「尽心作」における浅ダナウキのバリエーション

私が制作している「尽心作」の浅ダナ釣り用ウキは、Type-D（浅ダナウキの標準型、両だんご・トロ掛けセット用）、Type-D2（両だんごの追わせ釣り用）、Type-D3（浅ダナウドンセット用）の3タイプを基本としている。

さらにType-D3（浅ダナウドンセット用）では、ボディと足の長さの比率を変えたType-D3改、ボディの直径を変えることによりオモリ負荷量を変えた2つの改良タイプを用意している。

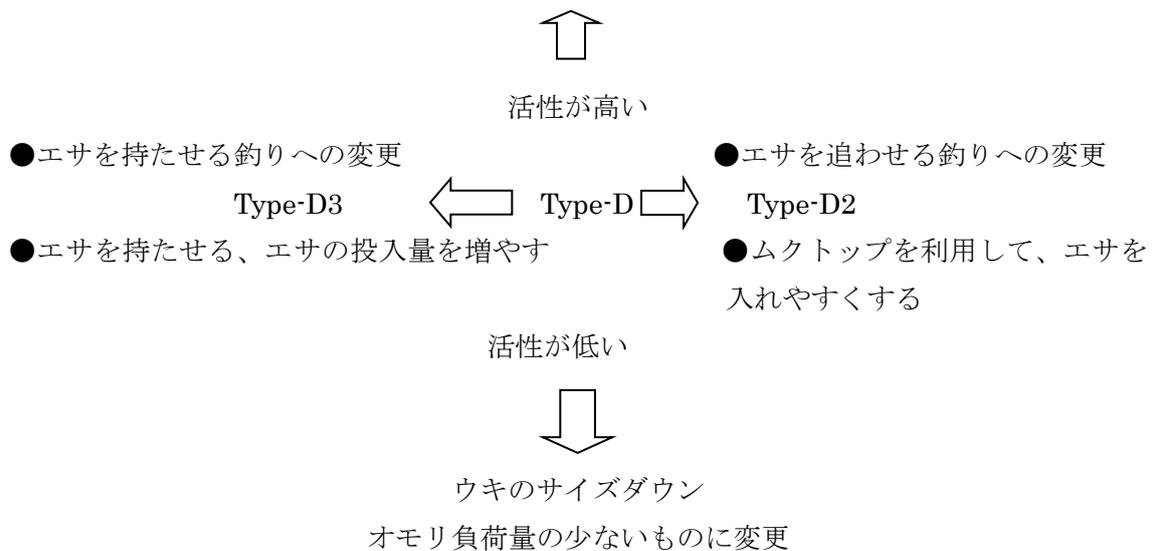
浅ダナ釣りでは、ウキの選択が釣果に大きな影響を及ぼすので、様々なタイプを用意している。

「尽心作」の浅ダナ釣り用ウキをチャートに当てはめると、表4のようになる。

(イラスト4)

イラスト4 「尽心作」浅ダナ釣り用のチャート

ウキのサイズアップ
オモリ負荷量の多いものに変更



各タイプのコンセプト

それでは、これらのウキはどのような状況のときに使い、形状・仕様の違いがどのような効果をもたらすのかを説明していこう。

Type-D

浅ダナウキの標準型、両だんご・トロ掛けセット用

ウキをしっかりなじませ、タナをつくって釣り込むときに使用する。ボディは「くさび型」とし、重心をウキ上部にしてオモリが高い位置でウキを立て、なじむ途中で受けを出させるような形状にしている。テーパ付きの細トップを採用し、エサを背負わせることを可能としている。ただ、タナを凝縮するために、あまり長いトップは必要ない。

脚はなじみこみのよいカーボン製とし、長さも脚長ウキの標準といわれる60mmとしている。

いわゆる浅ダナウキにおける標準型である。



Type-D : 浅ダナウキの標準型。両だんご・トロ掛けセット用

Type-D 2

浅ダナ両だんご追わせ釣り用

トロ掛けセットのときにトロロに興味を示さない場合や、だんごエサがぶらさがってしまうと極端に反応が悪い状況で使用する。トップを長めのPCムクにし、トップの長さとのバランスをとるために、足はカーボン製の長めとする。

ウキが立ち上がった直後からのアタリが取れるよう、トップの付け根付近で立ち上がり、トップの長さを最大限活かし、なじみ込み途中のアタリを積極的に取っていく。



Type-D2 : 両だんご追わせる釣り用

Type-D3

浅ダナウドンセット・パワー系
トロ掛けセット用

顆粒ペレットを含んだ比重の重いバラケエサをしっかりなじませ、タナをつくって釣り込む釣りに使用する。 ボディーは「くさび型」とし、重心をウキ上部にすることで、沈下するオモリが高い位置のときにウキを立たせ、なじみ途中でウケを出させるような形状にしている。

テーパーなしの細パイプトップを採用し、トップ根元から先端まで同一の太さにして、なじみ幅の調整を容易にしている。テーパーをストレートにすることでなじむ速度が一定となる。テーパー付きのトップに見られる、先端近くまでなじんだときにスッと沈んでしまうような感覚を排除している。また、タナを凝縮するために、あまり長いトップは必要ない。

足はタナを凝縮する意図から、なじみ込みのよいカーボン製とし、長さは足長ウキの標準といわれる60mmとしている。



Type-D 3 : 浅ダナウドンセット・パワー系トロ掛けセット用

使い方

Type-D

浅ダナウキの標準型、両だんご・トロ掛けセット用

エサ落ち目盛りの設定は、ハリを付けた状態で、全7目盛りの場合はトップ先端から4目盛り、もしくは5目盛り出したところ。全9目盛りの場合はトップ先端から5目盛り、もしくは6目盛り出しを基準とする。

これは底釣りの場合とは逆の、余浮力をあまり残さない設定である。つまり、トップのなじみ途中にサワリを出し、先端1目盛り残しまでなじんだ後のしっかりしたアタリを追っていく。

もし、ウキの入り（なじみ）が悪いと感じれば、エサ落ち目盛りをトップ上部に変更し、ウキの余浮力を減らして、ウキを入りやすくする。

Type-D 2

浅ダナ両だんご追わせ釣り用

エサ落ち目盛りの設定は、ハリなしの状態、ウキの肩とトップの接合点にする。そのため、ハリを付けてなじみ切ったところが、真のエサ落ち目盛りとなる。

なじみ途中のいろいろなアタリに手をだして、その日のヒットパターンを見

つける。

余り大きなハリを使うとウキが沈没してしまうので、エサの比重とハリのおおきさ、重さが、この釣法のおキモとなる。

Type-D3

浅ダナウドンセット・パワー系トロ掛けセット用

エサ落ち目盛りの設定は、クワセエサのウドンのみを付けた状態で、トップ先端から3目盛りもしくは4目盛り出しを基準とし、3目盛りもしくは4目盛りの間でバラケエサを調整する。限られた目盛りの間でバラケエサを持たせるため、エサが変化したときや上ずり傾向のときのなじみ幅の変化がわかりやすい。

このように、ウキの機能やエサ落ち目盛りの設定を工夫して、釣り人の心理に訴えることにより釣りを容易にする。これが製作者側から見たウキの視点である。

次回はウキの性能が釣果にダイレクトに影響する「浅ダナウドンセット」用のウキについて、製作者側ならではの視点から解説をしていきたい。

表-1 尽心作での浅ダナ釣り用ウキの仕様比較

	Type-D	Type-D2	Type-D3
ボディ-	クジャクの羽根2枚合わせ：5.8mm径	クジャクの羽根2枚合わせ：5.8mm径、	クジャクの羽根2枚合わせ：5.5mm径、食いが渋い時期に使うので、わずかの動きも表現できるように1本取り、もしくは2枚合せで5.5mm径にしている
足	カーボンで長さは60mm	カーボンで長さは100~120mm。PCムクの長さとのバランスをとるために、カーボンの長めとする	カーボンで長さは60mm

トップ	テーパー付き細パイプ	PCムク（根元径1.0mm→先端0.6mm）。トップの長さを活かしてなじむ範囲を広くして、動いているエサにしか反応しないヘラにアプローチする	ストレートの細パイプで、なじみ幅の調整がしやすいようにしている。テーパーをストレートにすることでなじむ速度が一定になる
トップの長さ	短い。60mm～90mm	長い。110mm～130mm	短い。60mm～90mm
ウキが立ち上がる位置	肩がやや出たところ	トップ付け根	肩がやや出たところ
形状	いかり肩（急テーパー）で重心をウキ上部にしているため、ウキが立ち上がった後、ウケが出やすい	いかり肩（急テーパー）で重心をウキ上部にしているため、ウキが立ち上がった後、ウケが出やすい	いかり肩（急テーパー）で重心をウキ上部にしているため、ウキが立ち上がった後、ウケが出やすい